今すぐできる、暑熱対策のコワザ（愛知県）

飼料タンク、分娩豚舎、肥育豚舎対策編

～施設の制約のなかでも風と水を上手に使って冷涼感を～

㈲あかばね動物クリニック　伊藤　貢

暑熱対策として、すぐに実行できるものを列挙してみました。

真夏の飼料タンク内部は60℃以上に

真夏の飼料タンク内部の温度は、60℃以上になると言われています。これに湿度が加わると、飼料の変性が生じます。とくに注意すべき点は、カビの発生によるマイコトキシン汚染、飼料中ビタミン類の力価の低下、などです。

① 梅雨に入る前に一度飼料タンクを空にして掃除をする
② 飼料タンクから給餌器までの流れを確認して、ホコリを取り除く
③ タンクに入れる飼料量をできるだけ少なくする
④ 飼料タンクに暑熱シートをかけたり（写真1）、防暑塗料（写真2）を塗る
⑤ カビ毒吸着剤と防カビ剤を飼料中に添加する。両者は目的が異なるので、併用することを推奨

豚舎周辺の温度を下げる

豚舎内の温度は、外気の温度と密接な関係があるので、できるだけ豚舎の周りの温度を下げるようにする。ポイントは、太陽熱を遮る、風を通す、水を散布して気化熱を奪う、の3つです。この3点を上手に利用して、豚舎の周りの温度を下げる工夫をします。

① 屋根の散水（写真3）または防暑塗料の散布。これらは天井のない豚舎、スレート屋根、屋根の低い豚舎に有効
② 豚舎の周囲に、樹木を植えて直射日光を遮る（写真4）。樹木に定期的に散水すればさらに効果的
③ 豚舎の下位置（人間の腰から下くらい）での空気の流れを良くすると、豚に直接涼しい風が当たる（写真5）

分娩豚舎を涼しくする工夫

母豚が飼料をたくさん食べるようにするには、涼しく感じさせることが重要です。豚舎内の風を動かし、水が十分飲め、新鮮な飼料が食べられるように気を配ります。

写真1　遮熱シート

写真2　防暑塗料

写真3　屋根の散水

写真4　豚舎の周辺に樹木を植える

写真5　豚舎に風を入れる工夫

写真6　凍らせたペットボトルを吊り下げてドリップクーリングに利用

写真7　子豚がなかに入りやすい保温装置

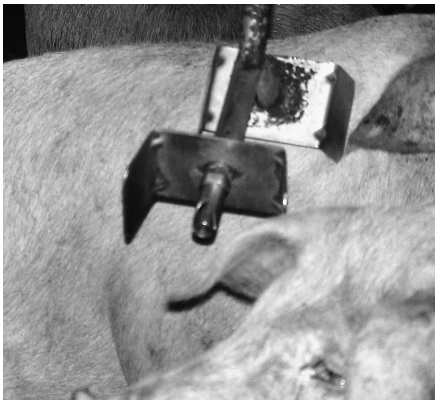
写真8　天井から吊るすタイプのピッカー

写真9　細霧装置付きファン

涼しく感じさせるには、クーリングパッドによる冷却が効果的です。しかし、施設面の制約と時間的な問題があるため、農場によっては対応できないことが多く、水と風を上手に使って冷涼感を与える方法を考えました。

① **低コストですぐに対応できるのは、ペットボトルを凍らせてフタを取り、そのまま豚の首の部分に滴下する方法。詳しい説明は省くが、もし行っていないなら、絶対に取り入れるべき技術（写真6、本誌●頁参照）**

② **分娩舎の腰板をすべて取り除く。分娩舎の仕切りは板の場合は風が流れるように柵にする。ただし子豚に風が当たらない場所を確保する（これができないと子豚が下痢をする）**

③ **保温箱は、箱形のものは排せつ場所にしてしまうことが多いので、できれば床に温熱マットを敷き、厚いビニールでスダレを垂らしたような形状のものにしたほうが、子豚がなかに入りやすい（写真7）**

肥育豚舎での発育停滞を防ぐ

夏場に一番力を入れるべきステージは肥育豚舎です。いつも夏場の発育停滞に困っている人は、一番暑い2ヶ月だけコストと労力をかけてください。肥育豚舎は、飼料をたくさん食べる環境をつくることがポイントです。

① **水が十分に飲める環境は絶対条件。飲水器が不足している場合は、別のラインで水道を設置する。浄化槽の処理能力に不安があるところは、夜や冬場は止める。写真8のように天井からピッカーを吊るすタイプの場合、簡単にピッカーの増設ができる。飲む量が少ないと思われるが、増設により、床面が濡れる、おもちゃ代わりになるなどの給水以外の効果も期待できる**

② **腰板を外して、床面に風が流れるようにする。また、ファンに細霧装置を付ける（写真9）**

愛知県では、7月末から8月半ばくらいまでは風を当てても問題はないが、8月半ばを過ぎたころから、夜間との温度差（夜間の温度低下）には気を配る

③ **生菌剤などのプロバイオティクス製品を7～8月の間は通常の1.5～2倍量を添加する。製品によって効果に変動がある。暑熱下でも飼料の摂取量が落ちないことが多い。逆に効果がないのであれば、現在使用している製品の検討が必要な時期である**